



私のキャリアデザイン “できること”と“嫌いでないこと”

短期大学部 教授 武田 康雄

十数年前、車庫と物置になっている建物の改造を業者に頼んだところ、提示された見積りは予算をはるかにオーバーしていた。それならばと一念発起し、自分でやってみることにした。かなりの冒険であったが、大工であった父が使っていた道具が有ったし、自分には幼少の頃から父の傍らで見よう見まねで覚えた日曜大工の技術(?)があった。時間はかかったが、納得のいく出来映えの改造が出来た。この時、大工仕事の快感を覚えた。楽しかった。そんな風になんか浸りながら何かをしたことはそれまでなかった。

あと3年で古希を迎える。振り返ってみると今まで自分は出来ることで嫌いでないことをやってきたように思う。大学卒業後、高校の英語教員になったが、その延長線上にあったこれまでの人生がそれを物語っている。英語が“飛び抜けて出来た”訳でもないし、“大好き”な科目でもなかった。また、特に教員になりたかったという記憶もない。自分としては自然科学により魅力を感じていたと思うのだが、残念ながら物理や数学の成績は振るわなかった。英語教員になったのはその道が自分に一番出来ることで嫌いでないことだったからだと思う。むろん、それはそれで悔いのない、充実したキャリアの選択ではあった。

市郵学園ではキャリアデザイン学科の教員としての奉職が最後となる。この学科は、非正規雇用が大手を振り、非情な買い手市場に変貌した社会に対して、新しいキャリア教育よって学生の就業を実践的に支援することを目指して設立された。そこでほぼ結論が出た当事者である自分のキャリアに対し

て、どのような“そうあるべき”キャリア教育(支援)があり得たかを考えてみようとした。が、それは無理な想定であると分かった。社会のパラダイムが変わってしまったからである。学生当時、ニートやフリーターは社会現象になっておらず、私を含めた殆どの学生にとって就職することはごく当たり前のことであった。大卒者の就職は売り手市場でもあり、昨今の非正規雇用の問題もなかった。

学生生活はクラブ活動と学資を得るためのアルバイトに明け暮れた。卒業を控えた私には、アルバイトを通して知り合った社長さんの経営する製造会社の営業社員になるか、英語教員になるかの二つの選択肢があった(二つしかなかったが)。結論はご覧のとおりである。思えば良き時代であった。卒業すればどこかに就職できた。学生は、どのような形であれ一生懸命学生生活を送れば良かった。

時代が違うとはいえ、自分にはキャリアデザインといえるものはなかった。自分を知り、その自分の能力や素質を生かせるように自分の将来をデザインし、準備することがキャリアデザインであると思うが、自分には「嫌いなものを避け」、その時「自分にできること」をするという感覚的な選択ぐらいしかなかった。学生時代に今のようなキャリアデザイン教育があったら、私は大工になっていたかも知れない。しかし自分のキャリアにはそこそこ満足している。大工の道を選ぶべきであったかどうか、思いは複雑である。まもなくキャリアを終える。残された時間、せいぜい暇に任せて好きなことをしてみたいが、老化との戦いが待ち受けている。



人間生活科学部 教授 星野 政明

三重県立看護大学附属図書館の歩み

▼三重県立看護大学附属博物館



三重県立看護大学附属図書館は三重県内における看護学の拠点大学として、平成9年の開学以来、学生はもとより卒業生・修了生や地域の皆様にも開放した施設として運営されてきました。学生だけでなく、三重県内の看護学を専攻する学生や医療従事者の皆様にも気軽に利用できるように、平日は21:00まで、土日も17:00まで開館されています。

平成21年4月に公立大学法人へ移行、翌平成22年4月より国公立大学として初めて株式会社紀伊國屋書店に図書館業務の全面委託が行われ、民間企業への全面委託による大学図書館としての質の向上や円滑かつ経済的な図書館経営に移行することが可能となりました。学術雑誌は、外国雑誌55誌のうち49誌を電子ジャーナル化するとともに、国内の学術論文がインターネット上で読めるメディカルオンラインやCiNiiの導入が行われています。紀伊國屋書店の支援で、メディカルオンラインを中心とした教員や学生向けの講習会の実施、さらには授業やオリエンテーションでの文献検索講習の実施による利用者の文献リテラシー向上のサポートもされていま

す。その結果、文献の検索や入手が迅速かつ容易になり、本学教職員、学生をはじめ学外の利用者の方からも高い評価を得ています。さらに電子書籍についても積極的に導入が行われ、特に看護学の教育研究に関する参考図書や図説資料等が整備されてきています。

入口からの通路には、新たに一般雑誌と新聞の閲覧コーナーとソファも配置され、ラウンジとして活用されるように整備されています。また附属図書館のセキュリティ強化のため、入館ゲートを設置され、図書管理システムと連動して、より正確な利用者統計も取得できるように改良されています。

さらに図書館利用の活性化のために、AVコーナーを1階に移動させ学習と相談に使えるラウンジと学習スペースの増設で、学習環境も整えられています。現在、蔵書冊数は約7万3千冊、看護・医療関係のデータベース等を合わせて、看護・医療分野の図書館としては県内屈指の資料数となっています。

平成24年5月開学15周年記念事業として図書館2階に、「附属看護博物館」として開館され、地域の方にも協力を仰ぎながら収集された県内の三重の看護史にかかわる資料を展示されています。そして三重県下で看護職に携わる方や看護職をめざす方の、交流と新たな情報発信の拠点として活用されています。

この様に図書館は、専門分野に特化した学習の中心拠点として多くの医療従事者や学生の皆様に利用される様配慮され高評価されています。

※取材にあたって、斉藤 真館長・西山 雅一様にご尽力を賜り感謝いたします。

(初代図書館長)

伊藤 秀史 著

『ひたすら読むエコノミクス』

(247 頁) (有斐閣)



経営学部 講師
野方 大輔

人生は常に選択の連続である。おそらくみなさんどこかで聞いたことのある言葉じゃないでしょうか。これまでの自分の人生を振り返ってみるといろんな選択に直面していたことに気づきます。たとえば、就職するか大学進学か、何のアルバイトをやるか、どこに住むか、夜ごはんは何を食べるか、今日友達と遊ぶか勉強するか。今後も、就職先、結婚…という具合に、人生では選択を迫られる(少し難しい言葉でいうと、意思決定を行う)場面を挙げればきりがありません。

というわけで、重要な選択に迫られたときに後々後悔しないためにも、今後はできればよりよい意思決定を行いたいと思いませんか?そこでこの本「ひたすら読むエコノミクス」がそのちょっとしたお助け本になろうかと思えます!第2・3章では、われわれの日常で直面する選択の問題を例にして、人間がいかにして望ましい決定を行おうとするのかが紹介されています。この部分から合理的な選択を行う人間の意思決定原理を知り、何が大切かをちょっと勉強してみましよう。

また今紹介した部分を実際読んでみて、面白いと思えたらその他の章も読むという選択をしてみてください。そこでは各人の行動だけではなく、多くの人が集まって行動・取引する「市場」についての解説もあり、やはり参考になる部分が多いです。数式も全くと言っていいほど使われずに話が進められていますので、多くの人がこの本を読み進めることができるかと思えます。もし読み終わることができれば、得るものは多く、きっとこの本を読むという選択をして良かったと思えるはずですよ。

長嶺 超輝 著

『裁判官の爆笑お言葉集』

(219 頁) (幻冬舎新書)



法学部 教授
高橋 利治

居間からかすかに聞こえる時計の音、雨の向こうから行き交う電車の車輪の音、夕暮れ時どこからか聞こえる犬の遠吠え…そんなかすかな音を感じながら、読書するということには残念ながら縁がありません。読む本のほとんどが、資料や法学関係の本ばかりで「読書」に通じる本は見当たらないのです。そんな乏しい読書生活ではありますが、法学の知識を持つ学生のみなさんに学問を感じることなく読める本を紹介します。

長く弁護士を目指し司法試験に挑戦した著者による『裁判官の爆笑お言葉集』です。法学や裁判官としての職務を知り尽くした著者が、滅多に聞くことができない裁判官の本音や価値観を裁判の傍聴を通し拾った言葉などを集めたものです。取り上げられている事例の中には、当時話題になりマスコミに大きく取り上げられた事件や芸能人なども登場し、多くの説明なしでも裁判官の心情を推し量ることができます。また、一般にはあまり知りえなかった事件については、裁判官が漏らした一言の裏側を著者が解明してくれています。事実と証拠を法律に照らし、客観的に判決を言い渡すことが原則ではありながら、人が犯すそれぞれの事件の卑劣さ・悲しさ・哀れさに対し、人として思うところが思わず漏れた裁判官の一言は、実に興味深いものです。

著者は、名古屋地裁に通う「絶坊主」のブログをお勧めしていますが、みなさんには、平日に時間のとれる学生時代に是非裁判傍聴もお勧めします。裁判の雰囲気を実際に感じた後に読んでみるのもよいかも知れません。



読書ガイド

読書ガイドでご紹介した本は図書館にあります。ぜひご一読ください。

福岡 伸一 著
『動的平衡
生命はなぜそこに宿るのか』
(254 頁) (木楽舎)



人間生活科学部 講師
上延 麻耶



本書は、生命とは何かという問に、身近な話題を交えて著者の視点から言及している。本題以上に、どの時代にどのような研究が盛んだったのか、第一線の研究現場の様子や科学者たちの人物像に興味深かった。例えば脚気について、食べ物が原因であるという栄養派と反対に、森鷗外はなぜ脚気菌の発見にこだわったのかなど、伝記を読んでいるようでおもしろい。さて、生命とは何かである。DNA の発見より 10 年以上も前、アメリカの生化学者シェーンハイマーは、食べ物に含まれる分子が身体の構成成分になり、それらは次の瞬間には身体の外に抜け出していくことを見出し、この分子の流れこそが生きていることであると述べた。これが、生物の動的平衡状態であり、生命とは何かに対する本書における著者の答えとも言える。そして、生命とは、たまたまそこに密度が高まっている分子の淀みでしかなく、生命は行く川のごとく流れの中にあり、私たちが食べ続けなければならない理由は、この流れを止めないためであると述べている。食べるということは生命現象そのものであり、食べた物が私たちなのである。そうすると、少々、大袈裟かもしれないが、管理栄養士は人の生命を管理するという事ではないだろうか。本書を読み終えた後、生命の不思議、神秘的なことに改めて感動した。みなさんも一度、本書を開いてみてはどうだろう。教科書の内容が少し面白くなるかもしれないし、自分が今ここにいることの素晴らしさを感じることもできるかもしれない。

渡辺 和子 著
『置かれた場所で咲きなさい』
(159 頁) (幻冬舎)



短期大学部 准教授
吾妻 民子



リーマンショックによる景気低迷、東日本大震災、深刻な二次被害、相次ぐ自然災害等、ここ数年人々は次々と想定外の苦境に置かれ、思わぬ試練にさらされている。ある時、書店のベストセラーコーナーで、絵本を思わせるような表紙の本書にふと目がとまった。頁をめくると、その素朴な表紙からは想像すらできない、著者の人生経験が生んだ力強い教訓が私の目に飛び込んできた。「人はどんな境遇でも輝ける」。本書は、逆境に立たされた時、あるいは日常の中で思い悩んだ時に、希望と安らぎとを与えてくれるであろう滋味あふれるメッセージ集である。

85 歳の著者は、修道者であり現役の教育者である。大学院を修了後、米国で修練を積む。順風満帆ともいえる人生を送ってきたはずの彼女であったが、弱冠 36 歳にして大学長に任命されたのを機に大きな壁にぶつかる。自信喪失に陥り、修道院を出ようとまで思いつめた彼女を救ったのは、ある宣教師から渡された英詩のフレーズであった。「Bloom where God has planted you. (神が植えたところで咲きなさい)」彼女は「境遇を選ぶことはできないが、自分を変えることができる…咲けない時は、下へ下へと根をのばす。つらい日々も、笑える日につながっている」と悟る。

確かに、誰しも期待通りの人生を送ることは難しい。長い人生を送る中、大学で、職場で、家庭生活で「こんなはずではなかった」と不本意に思う状況に直面することが多々あろう。著者曰く「神は力に余る試練を与えない」。本書は、若年層はもちろん、年齢を問わず、与えられた境遇の中で、苦しみながらも前向きに生きていこうとする人々にとって、貴重な一冊となるといえよう。



木島 淳 著『気仙沼に消えた姉を追って』を読んで

経営学部 中間 友健

私がこの本を手にしたきっかけは、とある動画サイトで著者である木島淳氏の話聞いてその話の内容がとても気になったからです。

本書は、2011年3月11日の東日本大震災に伴う津波で行方不明になった気仙沼に住む著者の姉が、当日どのような行動をとったのかを追うノンフィクションです。その足跡を追う手段として著者は、自分が生まれ育った気仙沼だけでなく、同じく津波の被害に見舞われた陸前高田も訪れて、被災した当時の様子をインタビューし、そこに被災者たちの普段の生活も纏めて文章にしています。

インタビューを受けたのは気仙沼の水産業で生計を立てる夫婦、大島で英語教師をする男性教師、気仙沼高校に通う高校生です。読んでみて感じた事は気仙沼という町にとって

「水産業」というのがいかに生活の基盤や経済の潤滑油になっているかが分かり大変興味深く感じました。

また、部活動中に被災してしまった高校生の話では、自然というのは建物などのモノはもちろんだが、部活で一緒に練習してきた同じメンバーと試合に出たいという彼らの淡い望みさえも奪い去ってしまうのだということに、人と言うのは自然から見れば、ほんとうに抗いようのない無力な存在なのだということを強く感じました。

本書はノンフィクションではありますが、是非手にとって読んでいただき、生き延びた被災者のことと共に、気仙沼の風土や歴史も知っていただければと思います。



坂本 光司 著『日本で一番大切にしたい会社』を読んで

経済学部 武田 幸二

この本は、著者の坂本光司さんが全国6000社以上の中小企業を訪問し、その中で坂本さんが考える会社の責任と使命を果たし、経営している企業が利益や業績以外にどこに目を向けていて、多くの会社が大切なのは業績向上だとか、顧客満足度だとか語っている時代どんな面で「大切にしたい」と思うような会社なのかが紹介されています。

この本に載っている、日本理化学工業株式会社は、神奈川県川崎市に昭和12年設立され、主にダストレスチョーク（粉の飛ばないチョーク）を製造している従業員が約50名の会社です。そして、その従業員の7割は知的障害をもった方々です。

50年ほど前から障害をもった人を雇うようになったのですが、障害をもった人と働くということは、どんな難しさがあるのか？それを

どうやって解決していったのか？他の中小企業とは何が違うのか？など、読んで頂ければこの会社がどのように責任と使命を果たしているのか分かっていただけると思います。

そのほか、全国の様々な業種の会社が載っています。他地域ではどんな取り組みをしている企業があって、自分の住んでいる地域にはどんな素晴らしい会社があるのか、経営の新しいあり方を知りたい方にぜひ読んでいただきたいです。



甲骨文と竹簡

法学部 霍 星



昔々人々が、獣の皮を衣類としていた時代、王様の側で専ら占いを行う人が、農業、狩猟、はたまた、天気や軍事行動などを占っていた。占う方法としては、太さが大人の小指ほどの金棒を真っ赤に焼き、机の上に直立させ、熱いうちに亀の甲羅または獣の肩甲骨を真っ赤な鉄棒の上に置き、ぱちぱちという音に伴い甲羅あるいは獣の骨の表面がはじけた「亀裂」によって占われる。そのはじけたヒビの形は、直線アーチ型、階段の形、放射状等様々な形をしている。占い師は、これを神様の答えと思い込みこれらのヒビを神秘的なものとして研究していた。そして、占い師は、占う内容を彫刻刀でヒビに沿って様々なことを書き込んだ。現在でいう文献である。そして、甲羅の上に書き込んだ文字のことを「甲骨文」という。そして、その占いの結果を竹簡（古代中国で紙が作られる以前に、文字を記すのに用いた細長い竹の札のこと）というものに書き移した。その竹簡の製造方法は、次のようである。すなわち、皮が薄く節が長い竹を切り、更に鋸で丸い竹ずつに必要な長さに切る。そして「火干し」という作業をする。その目的は、竹の水分を蒸し、カビが生えないように、また虫に食われないようにである。次に「書く」についてであるが、これについては筆で墨をつけ書いていくのだが、竹の表面は墨

が付きにくいのでナイフのようなもので表面の「緑の層」を削ってから字を書く、ここで中国の古典を特に説明する。みんな知ってのとおり中国の古典の内容は理解しがたい、その理由は、竹の幅は狭く十分な内容を書くには大量の竹が必要となる。また、字の書き間違いがあったならば彫刻刀で削って（字を削除して）書き直すという非常に面倒なことになる。なので、書く際には、その内容をよく考え文学的表現を用いてできるだけ短い文書で書く。次には、竹簡の上・下の部分で穴を開け、最後は麻縄で竹簡を閉じ、読むときには、机の上に平らに並べる。又、読んでからは、この竹簡を棚に置いて「巻」「冊」「編」と分けておく。この「巻」「冊」「編」という用語は、本の専門の用語として現在でも使われている。竹簡は、紙が出現していない当時いくつもの文字を書き記すもののうち、都合が一番であったと考えられる。文字を社会の上層階級だけのものではなく、広く世間に知らしめ、思想の交流に大きな役割をなした。紙が出現した後、総合的に比べると紙の利便性がある、こうした竹簡というものは、使用されなくなった。

小池義孝 著『不健康は治る!』を読んで

短期大学部 新井 裕也



本書は、著書である小池義孝氏の、不健康であった頃の生活、そしてそれをどう改善して健康になったのかという体験談から始まります。次に、「毒」とはどういったものであるのかということの説明していきます。一般的に思い浮かべる、ヒ素やニコチン等の毒物ではなく、普段食べている食べ物も摂り過ぎると毒となって体に悪影響を与える、という捉え方が書かれています。体に良い食べ物でも摂り過ぎてしまえば、逆に不健康になってしまうということです。第2章では、不健康を治すためにはどのような食生活をすれば良いのかについて書かれています。「牛乳などは必ずしも健康食品ではない」「ヨーグルトには整腸効果がない」「おかゆは消化吸収が良くない食べ物」など一般的に知られている内容とは異なる考えも多々あり興味を持って読み進めることができる本で

あると思います。そして第3章では、体の冷えについて書かれており、現代人の運動量の低下や、冷暖房に頼ることに対して危惧しており、体調不良や不調に自覚の無い人も、まずは体の冷えの対策を行うことが健康な生活に必要な不可欠であると説明しています。第4章では、良い姿勢を作る方法や呼吸法、睡眠の大切さなど良い生活習慣を得るための方法について紹介されています。本書は、「少しでも良い健康状態で充実した人生を送ってほしい」という考えに至る所に感じるができるものだと思います。不健康になると、体だけでなく心にも影響し、気持も不健康になるものです。普段の健康維持や、働いていく上での体調管理などに役立てるためにも、是非一度お目を通してみてください。

お知らせ Information

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

Library News
What is done can't be undone.
Time flies
Library News
What is done can't be undone.

今年度、本学図書館は私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会研究会の主幹事校を務めています。任務の一つとなる年2回の研究会は、下記のとおり行われました。

▶ 第1回

2012年6月25日[月]

開催場所 名古屋経済大学7号館

テーマ 「危機管理：図書館として」

講師 中沢 孝之氏(草津町立図書館)
野副 紫をん氏(名古屋経済大学学生相談室)

参加大学 38校

▶ 第2回

2012年10月18日[木]

開催場所 愛知大学名古屋キャンパス図書館

テーマ 「電子書籍：大学図書館における運用と利活用について」

講師 島田 貴史氏(慶応義塾大学メディアセンター本部)
中嶋 康氏(帝京大学メディアライブラリーセンター)

参加大学 29校

第1回研究会は、昨年3月の震災以降「危機管理」が高い関心を集めているためか、例年より多い参加館となりました。第2回研究会では、iPadなどの実機に触れながら活発な質疑応答が行われました。両研究会とも昨今の大学図書館にとって身近な議題であり、今後の参考となるものでした。

■「2012年度第1回学生選書の会」開催!

8月7日に、第1回目となる学生選書の会を開催しました。参加してくれた学生は計8名、各自思い思いの本を選定しました。特に『資格本』が多かった今回の選書本は、3階サービスカウンター前の学生選書の棚に並んでいます。ぜひ学生目線で選ばれた本を見に、図書館へ足を運んでくださいね。

学生選書本ブクログをはじめました!

<http://booklog.jp/users/meikei-lib>



■読みたい本は「希望の箱」へどうぞ

図書館の本を思う存分読んでいますか。自分の人生の一冊といえるような本に巡り逢え、一生の友となるかもしれません。もし読みたい本が図書館になかったら、3階サービスカウンターにある『希望の箱』へ用紙に書いて申し込んでください。ただし、まんが本等は除きます。

■コピー機が新しくなりました。

4階設置のコピー機が新しく替わりました。カード式は従来通りですが、カラーも撮れるようになりました。どうぞご利用ください。

図書館だより Vol.64 2012.11

発行所 名古屋経済大学 図書館 〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)
名古屋経済大学短期大学部 ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>
発行 年2回
印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171